

聖ブレンダンの航海（2）⁴⁵⁾

太古 隆治

13. 眠りの泉

祭りの日々が終わったあと、聖なる人々から島の収穫と祝福を受けるとただちに、聖ブレンダヌスはつき従う者たちとともに帆を大洋に向かって広げました。そして、ある時は糧を漕ぎ、ある時は帆にまかせて、あちらこちらに運ばれ、四旬節⁴⁶⁾の始まりを迎えました。

ある日、ほど遠くないところに島が見えました。兄弟たちは島を見つけると、しゃにむに漕ぎはじめました。飢えと渴きで憔悴しきっていたのです。食べものと飲みものが底をついたのは三日も前のことでした。しかし、聖なる父が港を祝福したのち、全員が船の外に出てみるとすぐに、澄みきった水の湧く泉が見つかりました。また、その泉の周囲には様々な香菜や根菜があり、海に注ぐ川をたくさん種類の魚が泳いでいました。

聖ブレンダヌスは兄弟たちに言いました。「神が、ここに苦勞のあとの慰めを与えてくださったのです。魚を私たちの夕食に必要なだけ取り、火で焼きなさい。主がしもべたちのためにご用意くださった香菜と根菜を摘みなさい」兄弟たちはそのとおりにしました。ところが、彼らが飲み水を汲んで飲もうとしたとき、神の人が言いました。「兄弟たちよ、気をつけなさい。その水は飲む量を誤ると体の毒になります」しかし、兄弟たちは神の人の制止を思いおもいに受けとめ、ある者は椀に一杯飲み、またある者は二杯飲み、ほかの者は三杯飲んでしまいました。すると三杯飲んだ者には三日と三晩の眠りが、二杯飲んだ者には二日と二晩の眠りが、そして残りの者たちには一日と一晩の眠りが襲ったのです。聖なる父は兄弟たちのため、休むことなく神に祈り、このような災いが彼らに降ったのは無知のせいなのです、と言って救いを請いました。

三日が過ぎて、聖なる父は仲間たちに言いました。「兄弟たちよ、さらに悪いことが起きないように、この死から逃げましょう。主が私たちに糧をお恵みくださったのに、あなたがたときたらそれを災厄に変えてしまったのです。それゆえ、この島

を出ていかなければならない。旅の食糧に魚を取り、主の晩餐の日まで三日のあいだ必要な数を貯えておきなさい。同じように水も一人につき一日一杯の量を積みなさい。また根菜も平等な数を積みなさい」神の人が命じたすべてを船に積み込むと、一行は帆を広げ、船を大海に漕ぎ出して北に向かいました。

14. 凝固した海

ところが、三日と三晩が過ぎると、風が止み、海がすっかり動きを止め、まるで凍りついたかようになってしまいました。聖なる父は言いました。「糧を船の中にしまい、帆もほどきなさい。いずこに船を向かわせられようと、神の望まれるがままにしましょう」こうして船はあたりをぐるぐる回って二十日が経ちました。そのあと再び神は、西から東の恵みの風を彼らに送りました。一行はただちに帆を高く掲げ、大海原を漕ぎ出しました。体に力をつけるのは常に三日に一度でした。

15. 祭りの日々

ある日のこと、はるか遠くに雲と見まがうように島が現れたのを見て聖ブレンダヌスが言いました。「息子たちよ、あの島を覚えていますか」彼らが「いいえ、まったく」と答えると、聖ブレンダヌスは言いました。「私には分かる。あれは、昨年の主の晩餐の日に私たちがいた島、私たちの良き世話人が住んでいるところだ」すると兄弟たちは嬉しさのあまり、持てる力をふりしぼって糧を漕ぎました。神の人はそれを見て言いました。「子供らよ、やめなさい、いたずらに体を疲れさせるのは愚かなことです。全能の神が私たちの船の舵取りであり、船頭ではないですか。神にゆだねなさい。なぜならば、神みずから、お望みのままに私たちの旅を導いていらっしゃるのです」

島の岸近くにくると、あの同じ世話人が小舟に乗って迎えに現れ、前の年に船を下りた港まで一行を案内しました。そして神を讃え、聖なる父から最後の者まで一人ひとり足に接吻してから言いました。「神はその聖なる御業において驚くべきかな。イスラエルの神はその民にみずから勇気と力を与える。神に祝福あれ⁴⁷⁾」この聖句を言い終えるや世話人は、荷をすべて船から降ろし、テントを張り、入浴の用意をしました。その日は主の晩餐の日だったからです。そしてすべての兄弟に真新しい服を着せ、三日のあいだ彼らの世話をしつづけました。その間兄弟たちのほうは主の受難を聖土曜日まで心をこめて祝いました。

聖土曜日の祭事を終え、靈的ないけにえ⁴⁸⁾を神に捧げて夕食をすますと、世話人は聖ブレンダーヌスとその一行に言いました。「ここを発って船に乗り込みなさい。そして昨年と同じ場所で復活の聖なる日曜日の夜⁴⁹⁾を祝い、同じように日曜の六時課まで祝いを続けなさい。そのあとまた船を出し、昨年の復活祭から聖霊降臨祭の八日目まで過ごした「鳥の楽園」と呼ばれる島に向かいなさい。必要な食べものと飲みものを持っておいきなさい。私のほうは次の日曜日にあなたたちを訪れます」そして一行はそのようにしました。世話人みずからパンと水、肉やそのほかのごちそうを、そろえられるかぎりそろえて船に乗せました。聖ブレンダーヌスは祝福を交わしたのち船に乗り込みました。そして一行はただちに別の島に向け出航しました。

船を下りる予定の地点に近づくと、なんと前の年に残したままの鍋が見えました。そこで聖ブレンダーヌスは兄弟たちとともに船を下り、「三人の子どもの賛歌⁵⁰⁾」を最後まで歌いました。賛歌を歌いおえると神の人は兄弟たちを諭して言いました。「息子たちよ、誘惑に陥らないよう、目を覚まして祈っていなさい⁵¹⁾。しかと見なさい、この恐ろしいことこの上ない動物を神は私たちの足もとにつなぎ、なんら害を加えさせないのです」かくして兄弟たちは島のあちこちに散り、朝課まで夜を徹して祈りました。そのあと、すべての司祭が一人ひとり神にミサを捧げ、三時課が来ました。そこで幸いなるブレンダーヌスは、穢れのない小羊を神に捧げ、兄弟たちに言いました。「私は昨年ここで主の復活を祝った。今年もまたそうするのが私の望みです」一行はさらにそこを出立し、「鳥の島」に向かいました。

その島の目ざす港に近づいていくと、すべての鳥がまるで一つの声のように歌っていました。「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである⁵²⁾」また次に「主なる神は私たちに光をお与えになった。祝祭の日を整えよ、祭壇の角まで祭りの枝を飾りて⁵³⁾」と歌いました。その声と羽の音楽は、聖なる父がその聖なる家族とともに船を下り、すべての荷を出してテントに落ち着くまで、およそ半時間ものあいだ鳴りやむことはありませんでした。

聖ブレンダーヌスがそこでもべたちと復活祭を祝うとすぐに、例の世話人が約束どおりやってきました。復活祭の八日目の日曜日のことで、人が生きるのに必要とするかぎりの食べものをたずさえていました。

一行が食卓につくと、前と同じ鳥が船の舳先にきて羽を広げ、大オルガンのように鳴らしました。神の人は、鳥がなにか言いたがっているのだと分かりました。実際、鳥は次のように言いました。「神は、あなたたちの七年間の放浪の旅が終わるまで、四つの季節を過ごす四つの場所を定められました。すなわち、主の晩餐の日

は毎年そこにいる世話人とともに。復活の日は巨獣の背中の上で祝います。復活祭から聖霊降臨祭の八日間までは私たちとともに。主の降誕はアイルベウスの家族のもとで祝います。様々な大きな苦難が待っていますが、七年後に、あなたたちが探している「聖人たちの約束の地」を見つけ、そこで四十日間暮らすでしょう。そののち神はあなたたちを生まれ故郷に帰してくださいませ。聖なる父は、これを聞くと、兄弟たちとともに地にひれ伏し、創造主に感謝と賛歌を捧げました。尊き老師がこれを終えると、鳥は自分のところに帰っていきました。

食事が終わったあと、世話人が言いました。「聖霊が使徒たちに降臨した日が来たら、神のお導きにより、あなたたちの食べものをもってまた戻ってきます」そして、聖なる父とその一行全員の祝福を受け、自分のところに帰っていきました。一方、尊き父は言われた期間その場所に逗留しました。かくして祭りの日々も終わると、聖ブレンダーヌスは、船を整え、水がめを泉の水で満たすよう兄弟たちに命じました。すでに船を海に引き出しにかかっていたとき、兄弟たちの食べものを満載した船に乗って世話人がやってきました。そして、それをすべて聖なる人の船に積みかえたあと、接吻を交わし、もと来た道を引き返していきました。

16. 海獣の戦い

尊き父は仲間たちと大海に漕ぎ出し、船は四十日のあいだ海上を運ばれました。とある日、はるか後方に巨大な獣が出現し、鼻から泡を噴き、波を砕き、彼らをひと飲みにしんばかりの猛烈な勢いで追ってきました。その様を目にした兄弟たちは神に訴えて叫びました。「主よ、私たちをお守りください、あの怪物に食べられてしまいます」一方聖ブレンダーヌスは、彼らを励まして言いました。「恐れる必要はない、なんと信仰の薄い者らよ。神は常に我々をお守りくださる。あの怪物の口からも、ほかの危険からも、私たちをお救いくださるにちがいない」

ところが、怪獣が近くに迫ってくると、うしろから恐ろしく高い波が船を襲い、兄弟たちの恐怖はつのる一方でした。尊き老師も天に向かって両手を広げ、言いました。「主よ、巨人ゴリアテの手からダビデを救われたように、あなたのしもべたちをお救いください。主よ、巨鯨の腹からヨナを救われたように、わたしたちをお救いください⁵⁴⁾」

この三つの嘆願の句を唱え終わるや、西の方から巨大な怪獣が姿を現わすと、前の獣をねらって彼らの横をかすめ、口から火をはきながら、一気に襲いかかりました。それを見て老師が兄弟たちに言いました。「見なさい、息子らよ、我らが贖い主の偉大なる業を見なさい、動物たちのなんと創造主に従順なことか。ただ事の

終わりを見届けるがよい。この戦いはあなたたちに災いをもたらすものではなく、神の栄光を示すものなのです」こう言い終わると、キリストのしもべたちを襲おうとしていた愚かな獣は彼らの眼前で三つに裂かれて殺され、勝者となった怪獣はもと来た方向に去っていきました。

次の日、遠くに木の生い茂った広々とした島が見えました。岸に近づき船を下りると、あの殺された獣のうしろ半分が見つかりました。聖ブレンダーヌスが言いました。「なんと、皆を食らおうとした獣だ。あなたたちのほうがこいつを食らうことにしなさい。この島で長いあいだ待つことになるでしょう。ですから、船を高いところに引き上げなさい。それから、この森の中にテントを張る場所を求めなさい」そして聖なる父みずから兄弟たちに住む場所を定めました。

神の人の命令どおりに行われ、必要なものがすべてテントに運びこまれると、聖ブレンダーヌスは兄弟たちに言いました。「あの獣から、あなたたちの三ヶ月分の食料を取っておきなさい。というのも、あの屍は今夜にもほかの動物たちに食べられてしまうからです」兄弟たちは、聖なる父に言われたとおり、必要とする肉を日暮れまでかかって運びつけました。さて、その作業がすべて終わると、兄弟たちが言いました。「院長さま、私たちは水なしでどうしてここで生きていけるのでしょうか」師は答えました「あなたたちに食べものよりも水を授けることのほうが神にとって難しいと言うのですか。島の南側に行ってみなさい。そうすれば、とても澄んだ泉、たくさんの香草や根菜が見つかるでしょう。そこから私にのためにも適度な量を取ってきなさい」彼らは神の人が予言したとおりのものを見つけました。かくして聖ブレンダーヌスはその島に三ヶ月のあいだとどまりました。というのも、海は荒れ狂い、強い風が吹き、雨や雹の降る、気候の変わりやすい季節に入っていたのです。

ところで、兄弟たちは例の怪物について神の人が言ったことを確かめに行ってみました。屍がもとあった場所に来てみると、見つかったものは骨だけでした。すぐさま神の人のところまで取って返し、言いました。「院長さま、おっしゃったとおりでした」院長が彼らに答えました。「息子たちよ、私には分かっている。あなたたちは、私が本当のことを言ったのかどうか確かめに行ったのだらう。あなたたちに別のことを予言してあげよう。ある魚の一部が今夜そこに打ち上げられ、あなたたちは明日それを食べて力をつけることとなります」翌日その場所に行ってみると、神の人が予言したとおりのものがそこにあり、運べるかぎり持ち帰りました。尊き父はまた言いました。「これをていねいに塩で保存しておきなさい。すぐにそれが必要となります。というのも、今日、明日そして明後日、素晴らしい天気を神が授

けてくださり、海の荒れもやむでしょう。そうなればここを出立することにします」

言われた日々が過ぎ、聖ブレンダーヌスは兄弟たちに、船に荷を積み、革袋もほかの器も水でいっぱいにし、ご自身が食べる分の香草と根菜を採ってくるよう命じました。というのも、聖職の叙任を受けて以来、命の息吹きの宿る肉はいっさい口にすることをやめていたからです。船積みが完了すると、帆を広げ、一行は北に向かって船を出しました。

17. 三組の聖歌隊の島

ある日のこと、遠くに島が見えました。聖ブレンダーヌスの「みんな、あの島が見えますか」の問いに、兄弟たちが「見えます」と答えると、師がさらに言いました。「あの島には三つの民が住んでいる。一つは子供の民、次は若者の民、三つ目は老人からなる民だ。あなたたち兄弟の一人があの島をさすらうことになろう」兄弟たちは、自分たちの誰のことを言っているのか尋ねました。兄弟たちが悲痛な面持ちで執拗に尋ねるので、聖ブレンダーヌスは言いました。「あの島に生涯とどまるのは、その兄弟だ」それは、聖ブレンダーヌスを追って修道院を飛び出し、船に乗り込み故国を発つ間際に師が予言を与えていた三人の兄弟のひとりでした。

一行は、船が岸に来て止まるまで、その島に近づいていきました。島は驚くほど平らかで、木はおろか風に揺れるものも何もなく、海の高さとも変わらないように見えました。非常に広々として、島じゅう白と赤のスカルタ⁵⁵⁾でおおわれていました。彼らはそこに、神の人が予言したように、三隊の人の群れを見ました。三つの隊のあいだには、投石器で放たれた石が達する距離ほどのへだたりがありました。そのそれぞれが絶えずあちらこちらと場所を変え、そのうち一つの集団がいか所に立ち止まり、合唱しはじめました。「聖人たちはいよいよ力を増し、シオンにいます神々の中の神にまみえるであろう⁵⁶⁾」一つの隊がこの詩節を歌い終えると、次の隊が立ち止まって同じ歌を歌いはじめ、こうしてあいだを切ることなく歌いつないでいきました。第一の隊は純白の衣を着た子供たちで、第二の隊は着衣、そして第三の隊は深紅の祭服をまもっていました⁵⁷⁾。

港に船を着けたのは四時課のことでした。六時課になると、三つの隊がそろって合唱しはじめました。まず「神が我らを憐れみたまいますように⁵⁸⁾」を最後まで歌い、次に「神よ、私を救いに来てください⁵⁹⁾」を歌いました。そして同じように第三の詩編「私は信じた⁶⁰⁾」を歌ったあと、前と同じように祈りがこれに続きました。同じように九時課になると別の三つの詩編、「深い淵の底から⁶¹⁾」と「見よ、なんと良きことかな⁶²⁾」、「エルサレムよ、主をほめたたえよ⁶³⁾」を歌いまし

た。そして晩課になると、「あなたには賛歌こそふさわしい、シオンにいます神よ⁶⁴⁾」と「私の魂よ、主を讃えよ。主よ、私の神よ⁶⁵⁾」そして三番目の詩編「子供たちよ、主を讃えよ⁶⁶⁾」を歌い、それから座って十五の昇階唱⁶⁷⁾を歌いました。

この合唱が終わるやいなや、異様に明るい雲の固まりが烏をすっぽりおおいました。しかし、雲が厚いために、それまで見えていたものが見えなくなりました。それでも、同じ歌を休みなく歌う声だけは朝課までずっと聞こえていました。朝課になると、「天上より主を讃えよ⁶⁸⁾」を歌いはじめ、つぎに「主に向かって歌え⁶⁹⁾」、三番目に「聖所で主を讃えよ⁷⁰⁾」と歌いつぎました。そのあと十二の詩編が詩編集の順番どおりに歌われました。

朝日が顔を出すと、烏をおおっていた雲が消え去り、それと同時に三つの詩編、「神よ、私を憐れみたまえ⁷¹⁾」、「神よ、私の神よ、夜明けから私はあなたを見つめます⁷²⁾」、そして「主よ、私たちの避難所⁷³⁾」を歌いました。三時課になると、別の三つの詩編、すなわち「すべての民よ⁷⁴⁾」、そして「神よ、あなたの御名によって⁷⁵⁾」、第三にアレルヤ付きで「私は愛する、なぜならば⁷⁶⁾」が歌われました。そのあと穢れない小羊を献げ、それから全員が一つになって合唱しました。「この神聖な主の体と救い主の血を、あなたたちの永遠の生命として受け取りなさい⁷⁷⁾」

こうして供儀が終わると、若者の隊の二人が、赤いスカルタでいっぱいのかごを担いできて船に運び入れ、言いました。「強き男たちの鳥⁷⁸⁾」の果実を受け取り、私たちの兄弟を返してください。そして平和のうちにご出立なさい」聖ブレンダーヌスはその兄弟を呼び寄せ、言いました。「そなたの兄弟たちに接吻しなさい。そして、そなたを呼んでいるお二人とともに行きなさい。あのような仲間の中で暮すにあたいするとは、そなたの母は幸運な時にそなたを宿したものです」兄弟全員と聖なる父に接吻した彼に、聖ブレンダーヌスは言いました。「息子よ、この世で神がどれだけの恩寵をそなたにお与えになったか忘れないように。さあ行きなさい、そして私たちのために祈っていてくれ」彼は、まっすぐ前に進み出て、二人の若者のあとを仲間のところまで去っていきました。

尊き父は仲間とともに出航しました。九時課が来ると、「強き男たちの鳥」のスカルタを食べて体につけるよう命じました。そう言って、神の人はその一つを手に取りました。そしてその大きさをながめ、果汁をたっぷり含んでいるのを見て、驚嘆の声を上げました。「このような大きいスカルタはこれまで見たこともなければ、読んだことすらない」実際、それは大きな玉のような形で、どれを取っても同じ大きさをしていました。神の人は壺を持ってくるよう命じ、一つをしぼってみて、一ポンドの果汁を得ました。そしてそれを一オンスずつ十二等分し、一人ひとりに

一オンスずつ与えました⁷⁹⁾。こうして十二日のあいだ、兄弟たちは一日一個のスカルタから力をつけ、そのあいだ甘い蜜のような味が口から消えることはありませんでした。

18. 葡萄の島

いく日も過ぎたのち、聖なる父は三日間の断食を命じました。その三日が過ぎたとき、ふと見ると、船の前方から一羽の巨大な鳥が飛んできていました。なにか名前の分からない木の枝をくわえていて、その枝先には見事に赤く熟した果実の房がついています。鳥はくちばしにくわえたその枝を聖なる人の膝の上に落としました。聖ブレンダーヌスはすぐさま兄弟たちを呼び寄せて言いました。「見てごらんなさい、そして神があなたたちに贈ってこられた食事をいただきなさい」実はひと粒ひと粒がリンゴほどもありました。神の人は一人ひとりにひと粒を与え、兄弟たちはこうして十二日のあいだ食べつなぐことができました。

再び神の人は兄弟たちとともに同じ日数の断食をはじめました。その三日目、ほど遠くないところに鳥が見えました。鳥は木が生い茂り、いずれの木も、鳥が運んできた同じ実が信じられないほどたわわに実っています。すべての木が、地に倒れんばかりに、同じ色の同じ果実をつけていました。同じ島に、実のない木は一本もなく、別の種類の木もまったく生えてなかったのです。兄弟たちは船を岸に着けました。神の人がひとり船を下り、鳥を見てまわることにしました。鳥の香りが、ザクロでいっぱいの中の家の中のようなものでした。兄弟たちは、神の人が戻ってくるまで、船で待っていました。そのあいだ、風が、彼らの断食を忘れさせようとするかのように、えも言われぬ甘い香りを運んできていました。一方、尊き父は、水が豊かで、青々とした香草と様々な根菜に恵まれた、六つの泉を見つけました。そこを見つけたあと、鳥の匂の恵みをもって兄弟たちのところに戻り、言いました。「船を下り、テントを張りなさい。それから、主が私たちに見せてくださった、この地の最高の恵みを食べて元気を回復しなさい」こうして四十日のあいだ、島の果実、そして泉の香草と根菜で元気をつけてすごしたのです。そのあと、船が運べるかぎりの鳥の恵みとともに乗船しました。

19. 鳥の戦い

乗船すると、風が導く方向に向け帆を広げました。ところが航行中、はるか遠くを彼らのほうに向かって飛んでくる鳥が見えました。グリフォンと呼ばれる鳥です。これを見て、兄弟たちは聖なる父に言いました。「あのけだものは私たちを食べに

きたにちがいありません」それに対し神の人はこう答えました。「恐れることはない。神こそ我らの庇護者、この度もきっと守ってください」鳥は爪を広げ、神のしもべたちにつかみかからんばかりでした。そのとき突然、かつて実もたわわな枝を彼らにもたらしたあの鳥が現われ、猛然とグリフォンに向かっていきました。グリフォンが噛みついてきました。鳥は防戦一方でしたが、のちに攻勢に転じ、グリフォンの両目をえぐり取りました。グリフォンはるか空高く飛んで逃げ、兄弟たちにもほとんど見えなくなってしまいました。しかし、容赦ない鳥はそれを逃がさず、息の根をとめるまで追っていきました。事実、兄弟たちのすぐ前の海上にグリフォンの死骸が降ってきました。一方、鳥はもと来た方に去っていきました。

20. アイルベウスの島

聖ブレンダースとその船員たちは、長いあいだアイルベウスの家族の鳥を見ていませんでしたが、その島で再び主の生誕を祝いました。祭りの日々が終わると、尊き父は修道院長とそのしもべたちの祝福を受けて出航し、定められた祭りの季節—すなわち、復活祭と主の聖誕祭—をのぞいては、長いあいだ大海原の旅を続けました。一方、祭りの季節は定められた場所で休息をとっていました。

21. 透きとおった海と大洋の不思議

あるとき、船上で聖ブレンダースが使徒聖ペトルスの祝日を祝っていたときのこと、船の下にあるものがすべて透けて見える澄みきった海にやってきました。海をのぞき込むと、様々な種類の動物が海底の砂の上で安んでいるのが見えます。海があまりにも透明で、その動物たちを手で触れることすらできそうに思えます。それはまるで、牧場で寝そべっている家畜の群れのようなものでした。無数の動物が互いに頭を前の尾に寄せて安んできて、その様子が円形に作られた町がひとつそこにあるかのように見えました。

兄弟たちは、静かにミサを歌うよう尊き父に祈りました。それを聞いた動物たちが自分たちを襲いに上がってくることを恐れたのです。聖なる父は笑いながら答えました。「あなたたちの愚かさにはあきれたものだ。どうしてあの動物たちを恐れるのです。海のすべての生き物を食べてしまう支配者を恐れることなく、その背中の上に乗って聖歌を歌ったというのに。そればかりか、その上で木を切り、火を焚いて肉を煮たではないですか。それなのに、なぜあの動物たちを怖がるのです。私たちの主、イエス・キリストは、あらゆる生き物がひれ伏す万物の神ではないですか」

こう言って聖ブレンダーヌスは、声をかぎりに高らかに歌いはじめました。ほかの兄弟たちは動物たちをずっと見つめていました。動物たちは、歌声が聞こえてくると、海の底から上がってきて、船のまわりを泳ぎはじめました。その数があまりにも多く、どの方向を見ても向こうが見えないほどになっていました。しかし、船には近づかず、遠巻きにして距離を保ったまま、神の人がミサを終えるまで、あちらからこちら、こちらからあちらと泳ぎつづけました。ミサが終わってしまうと、動物たちはすべて、海の様々な通り道を抜け、神のしもべたちの見えないところに散っていきました。聖ブレンダーヌスは、恵みの風を受け、帆を広げて、八日ののちにようやくこの透明の海を抜けることができました。

2.2. 海上の柱

ある日、ミサを行っている時、海上にそそり立つ柱が見えてきました。柱の位置はそれほど遠くないように見えたのですが、しかし、そのたもとに達するのに三日もかかってしまいました。神の人が近寄り、上を仰いでみましたが、あまりに高く柱の先が見えません。雲よりも高くそびえ立っていたのです。柱の周囲を目の粗い網状の幕が囲んでいました。網の一つひとつの目は船が通り抜けられるほどの大きさでした。幕が何でできているのか一行には分かりません。色合いは銀でしたが、硬さが大理石以上に感じられました。柱のほうは混じりけのまったくないクリスタルでした⁸⁰⁾。

聖ブレンダーヌスは兄弟たちに言いました。「襪を船の中に取り込み、帆と帆柱も降ろしなさい。そのあいだ別の者は何人かで網目をつかんでいなさい」幕と柱の間隔はどこもおよそ一マイルで、そしてそのまま海底まで続いていました。兄弟たちが言われたとおりにすると、神の人は言いました。「我らの創造主の奇蹟を目の前に見られるよう、網目から船を入れなさい」船を中に入れ、あたりを見渡すと、海がガラスのように澄んでいて、その下にあるものがすべて透けて見えるほどでした。実際、柱の土台が見え、幕が海底に達し、その端が底を這っているのが見えました。日の光も、海中でも外と変わらない明るさでした。

聖ブレンダーヌスが一つの網目の四辺⁸¹⁾を計ってみると、どの辺も四腕尺⁸²⁾ありました。そのあと柱の一つの面に沿ってまるまる一日船を漕ぎ進めました。柱の陰を通して、日の温もりが伝わってくるのが感じられました。こうして九時課になりました。その間ずっと神の人みずから柱の面の幅を計っていました。四つの面とも等しく千四百腕尺ありました。かくして尊き父は塔の四つの角の間を計るのに四日を費やしたのでした。

四日目、柱の南面の窓に、幕と同じものでできた杯と、柱と同じ色の皿⁸³⁾があるのを見つけました。聖ブレンダーヌスは二つの器をすぐさま手に取り、言いました。「主イエス・キリストはこの奇蹟を私たちにお見せになった。そして、多くの人がこれを見て信じるよう、この二つの贈り物を私に下さったのです」神の人はただちに神の勤めを行い、そののち、体に元気をつけるよう兄弟たちに命じました。実際、この柱を目にしたあと、彼らにはなにか食べ飲むことをいとう気持ちはさらさらありませんでした。

夜が明けると、兄弟たちは北に向かって船を進めました。そして網目の一つから外に出たところで帆柱と帆を上げ、一方、船内の用意が整うまでほかの兄弟らが網の目をつかんでいました。帆をすべて張りおえると、うしろから恰好の風が吹いてきましたので、ただ綱と舵を操るだけで、櫂を漕ぐ必要はありませんでした。こうして船は八日のあいだ北の方角に運ばれつづけました。

23. 鍛冶屋の島

八日後、ほど遠くないところに島が見えました。草も木もなく、岩と鉾津だらけの荒れ果てた島で、いたるところに鍛冶場がありました。尊き父は兄弟たちに言いました。「兄弟たちよ、あの島は恐ろしい島だ。私はあの島には行きたくない。近づくのも嫌だ。それなのに、風が、私たちを、まっすぐあの島に運んでいく」投げた石が届くほどの距離に来ると、ふいごが雷鳴のように響き、鉗が鉄と鉄床を打つ音が聞こえてきました。これを聞くと聖なる父は、四方に十字を切り⁸⁴⁾、言いました。「主イエス・キリストよ、我らをこの島から救いたまえ」

神の人が祈りの言葉を終えたそのとき、島に住む男の一人が、なにかしようとして外に出てきました。ひどく毛むくじゃらで、火のように赤く闇のように黒い⁸⁵⁾男でした。男は、島のすぐ前を横切るキリストのしもべたちに気づくやいなや、仕事場を取って返しました。神の人は再び十字を切り、兄弟たちに言いました。「息子たちよ、帆をもっと高く上げ、全力で漕ぎなさい。この島から離れるのです」こう言い終えるよりも早く、さきほどの荒くれ男がまっすぐ彼らに向い海岸に駆け寄ってきました。両手で火ばさみを持ち、その火ばさみで恐ろしく大きい真っ赤に焼けた石の塊をつかんでいます。男はやにわにその塊をキリストのしもべたちに向かって投げつけました。しかし、一行に害はありませんでした。彼らの頭の一スタディウム上を越えていったのです。それでも、それが海に落ちた一瞬、火の山が崩れおちたかのように煮え立ち、炉から吹き出す炎のような火柱が上がりました。

火の弾の落下点を通り過ぎ、一マイル離れると、島のすべての男が、一人残らず

火の弾を掲げ、海岸に走ってきていました。何人かがキリストのしもべたちめがけて火の弾を放ちました。後ろの者は前の者の頭ごしに放り投げ、かわるがわる鍛冶場に取り返しては新しい弾を焼き、まるで島全体がひとつの炉と化して燃えているような光景でした。また海も、肉のたっぷり入った大鍋をじっくり火にかけた時のように煮え立っていました。そして、島のほうから恐ろしい音が一日じゅう聞こえ、島が見えなくなったあとですら、島民のわめき声が耳に、そしてひどい悪臭が鼻に届いてきていました。このとき聖ブレンダースは修道士たちを力づけて言いました。「キリストの兵士らよ、偽りのない信仰、精神の鎧で身を固めなさい。私たちは地獄の国にいるのです。だから、目をしっかりと開け、勇気をもって振るまいなさい」

24. 火の山と三人目の修道士の末路

別の日、北の海上、それほど遠くないところに高い山が現れました。はじめは薄い雲がかかったように見えていましたが、それは頂上からもくもくと上がる噴煙でした。そのとき、突然の風が船をとらえ、猛烈な勢いで島の岸に向けて運んでいきました。船は陸近くに来てようやく止まりました。岸はつぺんが見えないほどの高い絶壁で、炭のように黒々とし、城壁のようにまっすぐそびえ立っていました。

そのとき、聖ブレンダースを追って修道院を出てきた三人の最後の一人が、船をとび出し、岸壁のたもとの方ほうにふらふらと歩きはじめました。そして聖ブレンダースに向かって叫びました。「ああ、父よ、私はあなたたちの元から奪い去られてしまいます。あなたのところに戻ろうとしても、その力が出ません」兄弟たちはあわてて船を陸から遠ざけ、そして主に向かって「我らを憐れみたまえ、主よ、我らを憐れみたまえ」と声高く祈りました。尊き父は、あわれな修道士が悪魔の群れの中で拷問にさらされ火に包まれる様を、兄弟たちとともに見つめながら、こう言いました。かわいそうな息子よ、お前はお前の生涯にふさわしい末路を迎えることになったのだ」

再び恵みの風が吹き、彼らを南の方向に引き戻してくれました。遠くから島を振り返ると、山をおおう煙が消え、そのかわり火炎が天空高く噴き上がったかと思うとふたたび吸い込まれ、山全体から海まで、燃えさかる薪の山のような有様になっていました⁸⁶⁾。

25. ユダとの遭遇

聖ブレンダースがこうして南に向い七日を経たとき、岩の上に座った人物らし

き影が見えてきました。その人影の前にはマントほどの大きさの布が、鉄でできた二本の熊手状の支えに垂れており、強風にあおられた船のように潮の流れに揺られていました。兄弟たちのある者はそれは鳥だと言い、ある者は船だと言い張りしました。神の人は、彼らがこのように言い合うのを聞いてさとししました。「言い争うのをよして、進路をあそこへ向けなさい」

神の人がそこに近づくと、まわりの波がまるで凍りついたかのように止まりました。岩の上には毛むくじらのみすぼらしい男が座っていて、四方の波が、寄せてくるときには男の顔にまでかかり、引いていくと、その不幸な男の座っている岩をむき出しにしています。前の垂れ布は、風に揺られて、男から離れたり、その目や額を打ったりしています。

幸いなるブレンダーヌスが、いったいどの誰で、どのような過ちのせいでここに送られてきたのか、このような罰を受けるのは何の報いなのか尋ねると、男は答えました。「私こそ、もっとも不幸な男、もっとも卑しい商人、ユダなのです。私がここにこうしているのはなにかの報いではなく、イエス・キリストの言葉で言い表せない慈悲のおかげです。この場所は私への罰として与えられたのではなく、救世主が主の復活を記念してお許しになったものなのです」実際その日は主の日⁸⁷⁾でした。「私にはここに座っていると、今晚私を待っている拷問の恐怖に比べれば、まるで喜びの楽園にいるように思えます。なぜなら私は、あなたたちもご覧になった山のまん中で、鍋の中で溶かされる鉛のかたまりも同然に、昼も夜も焼かれているのです。そこにはレヴィアタン⁸⁸⁾が手下を従えて棲んでいます。あなたたちの兄弟をレヴィアタンが呑み込んだ時も私はそこにいたのです。地獄の主は喜びのあまり恐ろしい炎を吐いていました。不信心者の魂をむさぼる時はいつもそのようにするのです。私はというと、主の日が来るたびに夕べから夕べまでの安らぎを与えられます。また、主の降誕祭から公現祭まで⁸⁹⁾、復活祭から聖霊降臨祭まで、聖母の御浄めの日⁹⁰⁾と被昇天の日⁹¹⁾もそうです。それ以外の日はヘロデ、ピラト、そしてアンナとカイファ⁹²⁾とともに地獄の底で責めさいなまれるのです。ですから世界の救い主の名にかけてお願いします、明日の日の出まで私をここにおいでくださいませよう、あなたたちが来られているあいだ悪魔らが私を責めさいなまないよう、私が悪しきお金で買った悪しき報いに引き戻されないよう、どうか主イエス・キリストにとりなしてください」聖ブレンダーヌスは答えました。「主のご意思がかくあらんことを。今夜は朝まで悪魔のえじきにはなることはありません」

神の人は再び尋ねました。「この布は何を意味するのですか」ユダが答えました。「この布は、私が主に仕えて金入れを預かっていたとき、らい病を患っていた者に

与えたものです。でも私のものを与えたのではありません。主と主の兄弟たちの持ちものだったのです。ですからそれによって私が得られるのは安らぎではなく、呵責なのです。その布が掛かっている鉄の熊手のほうは、鍋をかけるために神殿の祭司たちに贈ったものです。私が座っている石は、私が主の弟子になる前、町の道路にできた穴に通行人の足が取られないようにと私が置いたものです⁹³⁾」

テティス⁹⁴⁾に陰がかかる夕刻、おびたしい数の悪魔がぐりりとテティスの顔を覆い、怒声を発して言いました。「神の人よ、我らのもとから出ていけ。お前が出ていくまで、俺たちは仲間に近づけないのだ。仲間をお返しできないので王のお顔も拝めなかった。お前は俺たちの獲物を横取りしたのだ。今宵そいつを守るのをやめろ」それに対して神の人が答えました。「私が守るのではない。主イエス・キリストが、この者に明日の朝までここにいることをお認めになったのだ」悪魔らが言いました。「どうして主の名を借りるのか。その男は主の裏切り者ではないか」神の人は悪魔らに告げました。「我らが主イエス・キリストの名において汝らに命じる、朝までこの男にいっさい手を出してはならない」

夜が終わり、神の人が夜明けとともに出立しかけると、地獄の表面を無数の悪魔が覆い、無気味な声を発して言いました。「おお、神の人よ、お前の到来と出立が呪われんことを。俺たちは昨夜、そこの呪われた囚人を連れていけなかったがために、王にこっぴどく笞で打たれたのだ」神の人が応じて言いました。「お前たちの呪いは私たちではなく、お前たち自身にかかってこよう。なんとすれば、お前たちが呪う者こそ祝福され、お前たちが祝福する者こそ呪われるのだ」悪魔らが答えました。「かわいそうにユダはこれから六日間二倍の罰を受けることになる。お前たちが昨夜じゃまをしたからだ」尊き父が言いました。「汝らにも、汝らの王にも、そのようなことをする力はない。その力は神のみにある」さらにこうつけ加えました。「我らが主イエス・キリストの名において汝らと汝らの王に命じる、これまでにまさる責め苦をこの男に加えてはならない」悪魔らが言い返しました。「お前が万物の主で、俺たちがその言葉に従うべきだとでも言うのか」神の人は言いました。「私は主の召使いだ。そして何ごとであれ私が主の名において命じることはそのようになるべし。主が私にその権限を委ねられているのだ」悪魔らはこうして船のあとについてきましたが、ユダの姿が見えなくなるところまで来ると引き返していきました。そして、ユダを取り囲み、怒号を上げ無理矢理その不幸な魂をさらっていったのです。

26. 隠修士パウルス

一方、聖ブレンダースとその一行は、神のなせるすべてを讃えながら、南をめざして航海しました。三日目、はるか南に小さな島が見えました。兄弟たちがさらに力をこめて漕ぎ、島に近寄ると、聖ブレンダースが彼らに向かって言いました。「男たち、兄弟たちよ、あなたたちの体をいたずらに疲れさせることはない。あなたたちは充分働いたのです。私たちの故国を出てから、すぐそこまで来ている復活祭までもう七年になります。まもなく霊隠修士パウルス⁹⁹にお会いします。この島で、形ある食べものはいっさい食べず、六十年のあいだ暮しているお方です。その前の三十年間は、ある動物から食べものをもらっていました」

海岸に近づいたものの、高い断崖のために上陸できることはありませんでした。周囲一スタディウムほどの小さな円い島でした。島はまったく土がなく、火打石のような岩がむき出しになっていました。幅も奥行きも同じ、高さも同じでした。櫂を漕ぎながら島の周囲を回ってみたところ、かろうじて船の舳先が入る狭い港が見つかりました。それでも、上に登るにはきつい坂が待っていました。聖ブレンダースは兄弟たちに言いました。「私が戻ってくるまでここで待っていなさい。この地に住む神の人の許可なく入ることは、あなたたちには許されていません」

尊き父が島の頂上に登りつくと、太陽の昇る方向の山腹に、入り口が向かい合った二つの洞があるのが見えました。非常に小さな、皿のような形の円い泉も見えます。その泉は、キリストの戦士が住む洞の正面にある岩から湧き出し、湧き出たその位置ですぐに岩に吸い込まれていました。聖ブレンダースが一方の洞の入り口に近づくと、反対の洞から老人が現われ、聖ブレンダースを出迎えて言いました。「兄弟たちがひとつに暮すことはなんと良きこと、なんと喜ばしきことか⁹⁹」

そのあと老人は、船に残っている兄弟たちも皆ここに来よう命じなさい、と聖ブレンダースに言いました。一行がそろい、互いに接吻を交わしたのち腰を落ちつけると、老人は一人ひとりをその正しい名前前で呼びました。それを聞いた兄弟たちは驚嘆しました。老人の予知の力だけでなく、その装いも驚きでした。髪と鬚、そしてそのほかの毛が、全身を足先までおおっていただけでなく、非常な高齢のため雪のように真っ白になっていたのです。のぞいているのは顔と目だけで、体から伸びる毛のほかに身を隠しているものは何もありません。聖ブレンダースは、それを見て胸の中が苦しくなり、言いました。「ああ私は何としたことだ、私は修道士の衣をまとい、多くの者が修道士の名のもと私に従っている。その一方、いま私の目の前に、まさしく生身の人間のまま、天使のような姿で、これまで肉体の汚れに穢されたことのない方が座っている」神の人が言いました。「尊き父よ、神は、これまで聖なる父たちの誰にも明らかにしたことのない不思議を、なんと数多くあ

あなたにお見せになったことか。あなたは心の中で、修道士の衣を着るにあたいしないとおっしゃっているが、あなたは修道士よりも立派なお方だ。修道士というものは自らの手労働によって衣食を得ます。ところがあなたとあなたの家族は、神がその秘蹟で七年のあいだ身を養い、身をおおってこられました。私は、あわれなるかな、鳥と同じように体の毛のほか裸身を隠すものなく、この岩に座っているのです」

このとき聖ブレンダヌスは、老師がどうしてこの島に来たのか、どこから来たのか、いつからそのような生活を続けているのか尋ねました。老師が答えました。「私は聖パトリキウスの修道院で五十年間養われ、兄弟たちの墓地を守っていました。ある日のこと、私の上司が来て、亡くなったある人を葬るため、しかじかの場所を掘るよう私に指示しました。ところが、ある知らない老人が現われて私に言いました。「兄弟よ、そこを掘ってはいけない。そこは別人が入る墓なのだ」私が「父よ、あなたはどなたですか」と尋ねると、その方がおっしゃいました。「私を知らないのか。お前の修道院長ではないか」私が「私の修道院長は聖パトリキウス様です」と言うと、その方はお答えになりました。「私がそうなのだ。私は昨日この世を去った。それは私の墓なのだ。こちらのほうに私たちの兄弟の墓を作りなさい。だが、私が言ったことを誰にも言わないように。明朝、出立して海岸に向かいなさい。そこに小舟が見つかるだろう。それに乗り込めば、お前の死の日を迎える場所に案内してくれよう」

翌朝、聖なる父のお言葉どおり出立し、海岸まで来ますと、言われたとおりのものがありました。舟に乗り込み、三日と三晩漕ぎました。そのあとは風が舟を運ぶにまかせました。すると七日目、私の前にこの岩が現われたのです。私は舟を捨て、来たところに戻っていくよう足で突きました。そうして、たちまち舟が海原に波を切りものすごい速さで国に帰っていくのを見送りました。こうして私はここに残ったのです。九時課近くに、一匹のかわうそが海から食事をもってきてくれました。口にくわえた一匹の魚です。また、火を起こすための小枝の束を前足の間にかかえ、後ろ足で歩いていました。かわうそは、魚とたきつけを私の前に置くと、来たところに戻っていきました。私は、鉄で火打石を打ち、たきつけに火を起こして、その魚で食事をこしらえました。こうして三十年間、かならず三日に一度、同じ召使いが同じ三日分の食事を、つまり一匹の魚を、持ってきてくれました。私はその魚を毎日三分の一ずつ食べたのです。神のおかげでのどの渇きはまったくありませんでしたが、主の日になると、この岩山からわずかながら水が湧いて出て、そこから飲み水を得るほか、手を洗うために水入れを満たすこともできました。三十年が過ぎ去ってから、この二つの洞と泉を見つけました。私は今この泉だけで生きています。そ

れ以来六十年のあいだ、この泉の水以外なにも口にせず生きてきたのです。三十年間魚を食べ、六十年間この泉を糧とし、つごう九十年この島にいます。そして国に五十年いましたから、今の私の年齢は百四十歳になります。そしてここで今、私に約束されたように、この裸身で裁きの日を迎えようとしています。ですから、あなたたちは国に旅立ちなさい。水入れをこの泉の水で満たして持っていきなさい。それが必要となるでしょう。なぜなら、あなたたちの旅はまだ四十日、つまり復活祭の土曜日まで続くのです。あなたたちは聖土曜日と復活の主日、そして復活祭の聖なる日々を、六年のあいだ祝った同じ場所で祝うでしょう。そのあとあなたたちの世話人の祝福を受け、「聖人たちの約束の地」へと出立します。そしてそこに四十日間滞在したのち、あなたがたの父たちの神が無事あなたたちを故郷まで導いてくださるでしょう」

27. 祭りの祝賀

かくして聖ブレンダーヌスとその兄弟たちは、神の人の祝福を受け、四旬節のあいだずっと南に向かい、彼らの船はあちらこちらに運ばれていきました。彼らが口にするものは、神の人の島で汲んだ水だけでしたが、その水で三日ごとに元気をつけると、飢えも渴きもなくすべての者が満ちたりていました。

神の人に言われたとおり、世話人の島に到着したのは聖土曜日のことでした。一行が港に着くと、世話人が大喜びで彼らを出迎え、一人ひとり手を貸して船から上げてくれました。聖なる日の祭儀を済ませたあと、世話人は一行の前に晚餐を広げました。日が暮れると一行は船に戻り、世話人も同行して島を後にしました。

船を漕ぎ出すとすぐに、いつものところに例の大魚を見つけ、その上で夜通し神に献げる賛歌を歌い、朝が来るとミサを歌いました。ミサが終わると、ジャスコニウスが勝手に進みだしました。聖ブレンダーヌスとともにいた兄弟のすべてが主に向かって叫びはじめました。「私たちの声を聞いてください、神よ、私たちの救い主、地のすべての果てと海の彼方の希望よ⁷⁷⁾」聖ブレンダーヌスは兄弟たちを勇気づけて言いました。「恐れる必要はない。あなたたちには何の害もない。旅の手助けをしてくれているのです」魚は一直線に「鳥の島」に向かい、たちまちその岸辺に達しました。一行はそこで聖霊降臨祭の八日間が過ぎるまで滞在しました。

祝祭の期間が過ぎると、同行してきた世話人が聖ブレンダーヌスに言いました。「この泉の水で革袋を満たし、船に乗り込みなさい。この度は私もあなたたちの旅の仲間となり、案内をつとめます。私なしでは「聖人たちの約束の地」を見つけることは不可能なのです」乗船すると、島のすべての鳥が声をそろえて歌いました。

「私たちの救いの神があなたがたに幸福な旅をもたらしますよう⁹⁸⁾」

28. 聖人たちの約束の地

聖ブレンダーヌスとその一行は世話人の島まで戻り、そこで四十日分の食糧を積み込みました。彼らの旅は四十日の東への航海でした。この航海は、世話人が導き、旅の案内をつとめました。四十日が過ぎた日、夕暮れが迫る頃、濃い霧が一行をすっぽりおおいました。互いの顔も見えないほど濃い霧でした。世話人が聖ブレンダーヌスに尋ねました。「この霧が何か知っていますか」聖ブレンダーヌスが「何でしょう」と問い返すと、世話人は言いました。「この霧はあなたたちが七年のあいだ探してきた島を取り巻いているのです」一時間が過ぎたとき、今度はまばゆい光が一行をつつみ、船が岸に止まりました。

船を下りた一行の目の前には、大地が広々と横たわり、それをおおう木々は果物がたわわに実り、季節はあたかも秋のようでした。一行はその地を歩き回りましたが、彼らを夜が訪れることはありませんでした。果物を望むがままにもぎ取り、泉の水でのどをうるおしながら、四十日のあいだ探索を行いました。その地の果てを見つけることはできませんでした。ところがある日、島の中央を流れる大きな河にぶつかりました。ここで聖ブレンダーヌスが兄弟たちに言いました。「この河を渡るのには私たちには無理だ。この地がどれほどの大きさなのかも分からない」一行が思案に暮れていると、彼らの方に一人の若者がやって来ました。若者は大喜びで一行に接吻し、一人ひとり名前を呼び、そして言いました。「あなたの家に住む者は幸いなり。その者らは代々あなたを讃えるでしょう⁹⁹⁾」この言葉のあと、若者は聖ブレンダーヌスの方を向いて言いました。「あなたが長いあいだ探しとめた地はここです。あなたはすぐにはこの地を見つけられなかった。それは神が大いなる海の様々な秘密をあなたに見せようと望まれたからです。これからあなたの故郷に戻りなさい。この地の果物と宝石をあなたの船に入るだけ持って帰りなさい。あなたがあなたの父たちとともに眠る旅立ちの日が近づいています。長い時の流れのあと、キリスト教徒に対する迫害が押し寄せる時、あなたたちのあとに続く者たちにこの地は再び知らされることになりましょう。目の前の河はこの島を二つに分けています。ご覧のように、いま島は豊かに果物が熟していますが、いついかなる季節であってもそうなのです。夜の闇を知らず、変わることがありません。なぜなら、この島の光はほかならぬキリストなのです」

その地の果物とあらゆる種類の宝石を積み込むと、神聖なる世話人と若者を残して、聖ブレンダーヌスは兄弟たちと船に乗り込み、霧の中に漕ぎ出しました。霧を

抜けると、「甘美の島」と呼ばれる島に着きました。その島で三日のあいだ歓待されて過ごしたのち、聖ブレンダヌスは祝福を受け、まっすぐ帰国の途につきました¹⁰⁰⁾。

29. 聖ブレンダヌスの帰国と最期

長きにわたる父の不在で途方に暮れていた兄弟たちは、聖ブレンダヌスの帰りを歓喜で迎え、再び父の姿を見させてくださった愛情深い神に感謝を献げました。幸いな人は、彼らの情愛に感謝し、すべてを物語りました。旅の中で記憶に印した出来事、主が彼に見せてくださった奇蹟と不思議の数々を語って聞かせたのです。最後に、聖ブレンダヌスは、「聖人たちの約束の地」で若者が予言したとおり、彼の死が間近に迫っていること、それが確かなことであることを告げました。それは事の結果が証明したことです。というのも、死後のためにすべてを整えたのち時を経ず、神聖な秘蹟に守られ、弟子たちの腕の中から、誉れと栄光が世々続く主の御元に旅立っていかれたのです。アーメン。

注

45) 本誌前号掲載の「聖ブレンダンの航海(1)」に2点の誤りがあった。お詫びのうへ、次のとおり訂正させていただく。

79頁22行目 誤 「・・・島をさまようことになるでしょう」
正 「・・・島をさすらうことになるでしょう」

83頁注44 誤 全文
正 「1月6日。東方の三博士がイエスを礼拝するためにベツレヘムを訪れたことを記念する日」

46) 灰の水曜日に始まる復活祭までの40日余りで、教会が定めた悔い改めの期間。40日は日曜日などを含まない数字で、実際は46日間となる。この40という数は、イエスがヨルダン川でバプテスマのヨハネから洗礼を受けた後、伝道へ旅立つ前40日間断食をしたことを受ける。またモーセが十戒を記すためシナイ山にこもったのも40日間である（「出エジプト記」34.28）。

47) 「詩編」67.36。

48) 十字架上でみずからをいけにえにしたキリストを象徴する何らかの儀式と思わ

れる。「ペテロの手紙一」2.5 参照：「あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい」

49) 土曜から日曜にかけての夜で、復活の日のいわゆるイブ。

50) 「ダニエル書」3 参照。バビロニア王が作らせた黄金の像を拝まなかったため、王の命令で三人のユダヤの若者が燃え盛る炉の中に投じられるが、天使に保護され三人は炎をまぬがれる。「ヴルガタ」には炉に投じられた若者がその中で歌う神への賛歌が挿入されている（「新共同訳」では旧約聖書統編「ダニエル書補遺アザルヤの祈りと三人の若者の賛歌」）。カトリック教会は伝統的にこの逸話をキリストの復活と重ねあわせ、日曜日（主の日）に「三人の子どもの賛歌」を歌う。

51) 「マタイ伝」26.41, 「マルコ伝」14.38, 「ルカ伝」22.40。

52) 「黙示録」7.10。

53) 「詩編」117.27（「新共同訳」118.27）。

54) ダビデとゴリアテの戦いは「サムエル記上」17 に、鯨に呑み込まれたヨナの話は「ヨナ書」2 に語られている。もっとも古い写本の一つ A 写本は、「主よ、巨人ゴリアテの手からダビデを救われたように、あなたのしもべをお救いください。主よ、獅子の洞窟からダニエルを救われたように、私たちをお救いください。主よ、巨鯨の腹からヨナを救われたように、私たちをお救いください」と、ライオンの洞窟に放り込まれたダニエル（「ダニエル書」6）の故事を第三の嘆願句として引く。

『聖ブレンダン伝』の一つ（ed. Plummer, *Vita Prima Sancti Brendani*, xlv）にも、字句の違いはあるが、A 写本と同じ三つの嘆願句が同じ順序で見いだされる。この箇所については多くの写本が Selmer 版の底本 G 写本と一致するが、おそらく、A 写本に見られるような第三の嘆願句が写本伝播の早い時期に脱落したものと見てまちがいない。さもないと、次段落の冒頭「この三つの嘆願の句」と数が合わない。

55) 「スカルタ(*scalta*)」: «*scalta*»は、「キンセンカ」を表す古典ラテン語«*caltha(calta)*»を祖形に持つと考えられるが、中世ラテン語における正確な意味は不明である。7世紀アイルランドに成立したと推定されるラテン語韻文の *Hisperica famina* にも2例 («*porporeas scaltas / roseis scaltis*») 現れるが、そこでは何らかの花（もしくはその花をつける植物だが、黄色い花を咲かせるキンセンカではない）を指している。

『聖ブレンダンの航海』では、「*scalta*»は果汁をたっぷり含む大きな球形の果物であることが、この章の終わり部分の描写から分かる。O'Meara はこの語に«*fruit*»の訳語を与えているが、「このような大きいスカルタはこれまで見たこともなければ、読んだことすらない」の聖ブレンダンの言葉は、「*scalta*»が果実一般ではなく特定

の果実名を表しているものと思わせる。

56) 「詩編」 83.8。

57) 「純白の衣・・・蒼い衣・・・深紅の祭服 (in uestibus candissimis ... in iacinctinis uestibus... in purpureis dalmaticis)」: この島の住人は、キリストの精神に殉じるために故国を捨てたケルト修道士と見なしうる。三つの色は順に「無垢・活力・成熟」を象徴すると言われる (Wahlund p.252, Selmer p.89)。同時に、年齢による区別からうかがえるように、隊の序列を表すとも言える。「深紅 (purpura)」は古代より最高位者に許された色だった。アイルランド語で書かれた残存する最古の説教「カンブレの説教」(*Cambrai Homily*)は、神のために愛するものすべてを捨てるときが「白い殉教」、懺悔と労働を通して欲望を断つときが「蒼い殉教」、キリストのために十字架を負い、肉体の破滅に耐えるときが「紅い殉教」と、殉教の三つの段階を象徴的に色分けし、初期アイルランド修道制の特色を伝えている。

58) 「詩編」 66.1 (「新共同訳」 67.1)。

59) 「詩編」 69.2 (「新共同訳」 70.2)。

60) 「詩編」 115.1 (「新共同訳」 116.10)。

61) 「詩編」 129.1 (「新共同訳」 130.1)。

62) 「詩編」 132.1 (「新共同訳」 133.10)。

63) 「詩編」 147.12。

64) 「詩編」 64.2 (「新共同訳」 65.2)。

65) 「詩編」 103.1 (「新共同訳」 104.1)。

66) 「詩編」 112.1 (「新共同訳」 113.1)。

67) 「詩編」 119-133 (「新共同訳」 120-134)。ヘブライ人がエルサレムの神殿の階段を昇りながら歌った詩編。

68) 「詩編」 148.1。

69) 「詩編」 149.1。

70) 「詩編」 150.1。

71) 「詩編」 50.1, 55.2, 56.2 (「新共同訳」 51.1, 56.2, 57.2)。

72) 「詩編」 62.2 (「新共同訳」 63.2)。

73) 「詩編」 89.1 (「新共同訳」 90.1)。

74) 「詩編」 46.2 (「新共同訳」 47.2)。

75) 「詩編」 53.3 (「新共同訳」 54.3)。

76) 「詩編」 114.1 (「新共同訳」 116.1)。

77) この唱句は、聖餐式で歌われるもっとも古い賛歌で、4世紀の聖人 Sechnall

(Secundinus)の作と見なされている(Selmer p.89)。

78) 「強き男たちの島 (insula uirorum fortium)」: 第 12 章で「アイルベウスの家族の島」の修道院長が聖ブレンダンを追ってきた三人の修道士の一人がとどまることになると言った島は「隠修士の島 (insula anachoritarum)」と呼ばれていた。

79) 聖ブレンダンの随行員は現在 15 人であり、1 個のスカルタを平等に分けるにはそれを 15 等分しなければならない。

80) この海にそそり立つ柱の描写に氷山との遭遇の体験を見ることができる。ちなみに、北大西洋上で氷山が観察できるのはアイスランドとニューファウンドランド島の間の海域である。

81) 原意は「四つの幕のあいだの一つの口 (穴) (foramen unum inter quattuor chonopeos)」だが、異本を参考に別解釈をする。

82) 「腕尺 (cubitus)」: 長さの単位。肘から中指の先までの長さで、およそ 45 センチ。

83) 杯(calix)と皿(patena)はカトリックの用語としてはそれぞれ聖杯と聖体皿を指し、重要な祭儀の用具である。実際、聖ブレンダヌスはこれを用いて祭儀を行う。

84) 文字どおりは「主の勝利の印 (トロフィー) で身を固める (armavit se dominico tropheo)」

85) 「火のように赤く闇のように黒い (igneus atque tenebrosus)」: 地獄の火と闇を想起させる表現か、あるいは、単に火に焼け、すずみ汚れた様を言わんとする比喩か。

86) 第 23 章の「鍛冶屋の島」および第 24 章の「火の山」には誰もが火山活動を想起する。周知のように北大西洋で火山活動が見られるのはアイスランドであり、このアイスランドにはヴァイキング来襲以前にケルト修道士が活動していたことが歴史資料により確認されている。

87) キリストは金曜日に十字架にかけられて落命したのち、日曜日に復活したとされ、教会は日曜日を「主の日(dies dominicus)」と呼ぶ。

88) 旧約聖書に現れる怪獣。「ヨブ記」40.5 ではワニ、「イザヤ書」27.1 では蛇が、レヴィアタンと呼ばれている。

89) クリスマスから 1 月 6 日の公現祭まで。

90) 2 月 2 日。マリアがキリスト誕生の 40 日後、浄めの儀式を行ったのを記念する日。

91) 8 月 15 日。マリア永眠の日を、聖母が聖霊によって天に引き上げられた日として祝う日。

92) ヘロデはイエスの処刑を実行させたイスラエル王。ピラトはユダヤにおける

ローマの総督で、イエスの無実を信じながら、有罪に反対できなかった人物。アンナとカイファの二人は、イエスの死刑に賛成したユダヤ教の大祭司。

93) 聖書にはどこにも書かれていないが、ここで物語られているようなユダの「三つの善行」の伝承が存在したものと思われる。

94) 「テティス(Thetis)」:ギリシャ神話の海の女神で、トロイ戦争の英雄アキレウスの母。ここでは言うまでもなく「海」の代名詞。

95) 「最初の隠修士」と称されるテーベのパウルス(紀元3～4世紀)。皇帝アキウス(在位249～251)の時代のキリスト教徒に対する迫害を逃れ、エジプトの砂漠の奥で隠者として生涯を送り、113歳で亡くなったという。聖ヒエロニムスの「最初の隠修士パウルスの生」(注37参照)で描かれる砂漠の庵が、ここでは孤島の洞窟に置きかえられている。

96) 「詩編」132.1(「新共同訳」133.1)。

97) 「詩編」64.6(「新共同訳」65.6)。

98) 「詩編」67.20。

99) 「詩編」83.5(「新共同訳」84.5)。

100) 半数近い写本が、この「まっすぐ帰国の途につきました」で物語を締めくくり、Selmer版の最終章(第29章)を欠く。これにより『聖ブレンダンの航海』の写本は大きく二つのグループに分かれる。両グループとも最も古い写本(10世紀)が含まれており、早い時期に二分化が起きたとすることができる(Selmer pp.97-98)。同時に、続く第29章はオリジナルに存在しなかった可能性も考えられる。

Le Voyage de Saint Brendan

Ryuji TAIKO

Vers le 9^{ème} siècle, un homme anonyme, probablement un clerc irlandais, a composé un récit de voyage en mer (*Navigatio Sancti Brendani*). Ce récit, qui raconte comment Saint Brendan (un saint du 6^{ème} siècle) part avec 17 moines en quête de la *terra repromissionis sanctorum*, parcourt l'Océan Atlantique et au bout de 7 ans découvre la terre promise, a joui d'un énorme succès pendant tout le Moyen Âge, a été traduit en plusieurs langues vernaculaires européennes et ne cesse encore de fasciner les lecteurs modernes.

On connaît jusqu'ici deux traductions japonaises du *Voyage de Saint Brendan*. Mais ce ne sont que des traductions des textes dérivés : celle du poème français écrit au premier quart du 12^{ème} siècle par un certain Benedeit et celle d'un Volksbuch allemand publié en 1476. Le présent travail, basé sur l'édition publiée en 1959 par Carl Selmer, est la première traduction en japonais du texte latin original.